論文の和文要旨

論文題目　　アカン語アシャンティ方言の研究　—特に音韻を中心として—

氏　　名　　古閑 恭子

本論文は、西アフリカガーナ共和国の現地語の１つであるアカン Akan 語アシャンティ Asante 方言を対象とする記述研究であり、特にその音韻面に焦点を当てて考察する。本論文は、第１章「序論」、第２章「アカン語の音韻と形態」、第３章「アカン語の母音調和」、第４章「アカン語の声調」、第５章「アカン語の発話のリズム」、第６章「結語」の計６章から構成される。

第２章「アカン語の音韻と形態」では、アカン語の構造の全体像を、音韻および形態の面から概観する。音韻については、第一に母音および子音体系について、第二に音節構造について、第三に声調の種類と機能について概説する。形態については、名詞、動詞、繋辞、代名詞、形容詞、副詞、接続詞、および第３章、第４章を中心として議論の対象となる接語を取り上げ、その形態的特徴や種類、機能について概観する。

第３章「アカン語の母音調和」では、本論文における第一の中心的テーマである母音調和に関して論ずる。主に次の３つの問題に焦点を当てる。第一に、アカン語の母音調和の非対象性に関する問題である。アカン語の10母音 i, ɪ, e, ɛ, a, ɜ, u, ʊ, o, ɔ のうち、i とɪ、e とɛ、u とʊ、o とɔ はそれぞれ母音調和素性[Expanded]に関して対立するが、a と ɜ についてのみこのような対立が見られない。しかし、共時的には a の異音である ɜ の分布の制限は e, o の分布上の制限と類似する。すなわち、これらの母音は基本的に i, u と共起する。このような分布上の制限は、i, u が共起しない環境においてこれらの母音が[–Expanded]になるという通時的変化によるものであ

ると考察する。

第二に、語根境界におこる母音同化について、先行研究間あるいは先行研究と筆者のデータ間に、同化がi, uによってのみ引き起こされるか、e, oによっても引き起こされるかという相違点があることを指摘し、この相違を通時的変化によるものと解釈する。そしてこの相違が母音調和領域である語内においてɜ, e, oが基本的にi, uと共起することに関連すると考察し、母音調和と母音同化に起こった通時的変化は、もともと[+Expanded]母音が持っていた[–Expanded]母音への影響力の喪失という同様の変化であると考察する。

第三に、先行研究においては例外なく「接頭辞」とされる後接語の母音の振る舞いに焦点を当てる。先行研究において後接語が「母音調和」の対象とされ、筆者のデータにおいて後接語は語根と同様に「母音同化」する、という違いは、先の母音同化に関する先行研究間あるいは先行研究と筆者のデータにおける違い、すなわち母音同化の引き金となるのがi, uのみかe, oも含むかという違いに並行する。このことから、後接語に関する先行研究と筆者のデータの違いもまた母音調和、母音同化に起こった通時的変化と同様の変化によってもたらされたものであり、この通時的変化が語根におけるそれに比べてごく近年起こったものであると考察する。さらにこの第二、第三の仮説に対応するような音響的相関が得られることを提示する。

以上の考察から、アカン語の母音において、[+Expanded]母音と[–Expanded]母音は対等の関係にあるというより、[+Expanded]母音が有標であること、母音調和と母音同化は基本的には同様の現象であり、両者の違いは語根内、接辞境界、接語境界、語根境界といった形態論、統語論的環境に応じて[+Expanded]母音がどの程度周辺母音に影響を及ぼすかの違いであると考察する。

第4章「アカン語の声調」では、本論文における第二の中心的テーマである声調を扱う。第一に名詞の声調を取り上げ、まず名詞語根および接辞が、基底においてどのような声調情報を持つかについて考察し、接辞に関しては独自の声調を持たずに派生によって声調がもたらされ、語根の声調に関する情報はトーンメロディおよびアクセント情報からなると分析する。次に、所有名詞句構造における声調の変化を取り上げ、名詞が声調に関して2つのクラスに分類され、両クラスに対する連結方向のみが異なる統語的なHの挿入規則によって変化がもたらされると考察し、この規則によって全ての声調タイプに対して、適切に表面声調形が誘導できることを示す。

第二に動詞の声調を取り上げ、15の活用形における表面声調形がどのように決まるのかについて考察する。そしてこれらの表面声調形を決定する要素は、①各形態素の基底声調、②活用形固有の声調、③声調規則、④アクセント移動規則の4つであると分析する。

第三に、語根＋語根の構造における声調を取り上げ、この構造において声調がどのように振舞うかを概観し、各要素の相互依存の程度によって各要素が本来の声調で現れるもの、一部あるいは全体が画一の声調となるものの2種類に分類されると考察する。

第四に接語の声調を取り上げ、語と同様に振舞うもの、接辞と同様に振舞うもの、語と接辞の中間的な振る舞いをするものがあることを示し、このような接語の声調の振る舞いは、接語が語から接辞への移行段階にあることに対応するものであると指摘する。

第5章「アカン語の発話のリズム」では、本論文における第三の中心的テーマであるアカン語のリズムについて考察する。第一に、アカン語の自然発話は、聴覚的に複数音節のまとまりによって構成される。このまとまりが知覚されるのは、まとまりが聴覚的に同程度の長さである、つまり等時性を持つからであり、この聴覚的に等時性を持つまとまりが、アカン語のリズムの単位をなすのではないかという仮説を立てる。

第二に、アカン語に豊富なことわざを題材として取り上げる。ことわざのような口頭伝承は、一般的に当該言語話者によって自然発話と区別され、その際拠り所となるのは、一義的には韻律的特徴であり、またこの韻律的特徴は自然発話のそれを利用したものであるという見解がある(Taylor 1931, 1985, Ben-Amos 1969)。このような見解に基づき、自然発話における聴覚的まとまりの等時性がことわざにおいてより強く現れるという仮説を立てる。本章では、発話における聴覚的まとまりの等時性の音響的パラメータは、まとまりの持続時間の近似性であると仮定し、データの測定、提示を行う。

アカン語のリズムに関する実験音声学的研究から得られた知見は、以下の3点である。第一に、アカン語の自然発話において、聴覚的まとまり(フット)に対する音響的相関として、フットの持続時間の近似性が示される。第二に、このフット長の近似性に一義的に関わるのは、母音のセグメント長の調整であり、フット長の近似性に貢献するような伸長・短縮が起こる。第三に、自然発話におけるフットの持続時間の近似性は、ことわざにより顕著に現れる。近似性に関するこの違いは、ことわざにおいては自然発話に比べてフット内の音節数のばらつきがより制御され、さらにフット長の近似性により貢献するような音節長の伸長および短縮がなされることによってもたらされる。このような音響的特徴から得られる知見により、先の仮説の妥当性は高いと考察する。

本論文は、主に以下の3点において、意義があると考える。第一に、コーパスの側面においてである。アカン語の記述研究はいくつかあるが、それらの研究で扱われるデータは収集時期が古く、共時的研究には不十分である。本論文の至る所で指摘するように、アカン語の音韻には通時的変化が顕著である。本論文で提示する、筆者が2001年から2006年にかけて収集したデータは、共時的研究のみならず、方言間の比較研究や通時的研究にも貢献できると考える。

第二に、アカン語は、特に母音調和を中心とする音声・音韻分野に関して、

ブラック・アフリカ諸言語の中では比較的研究がなされているとはいえ、まだ着手されていないテーマも少なくない。本論文では、そのようなテーマのうち特にアカン語のリズム、接語に関する研究に取り組み、重要な指摘を行うことができたと考える。

第三に、既に研究されている分野においても、未解決の問題が多く残されている。本論文は、それらの問題のうち特に母音調和と声調に関する問題に取り組み、新たな解釈や分析法を示すことができたと考える。